

# CONTENTS

## 現場に役立つ日本語教育研究 2 目次

まえがき 森篤嗣 iii

### 第一部 アプローチ別語彙シラバス論

- 第1章 初級総合教科書から見た語彙シラバス(田中祐輔) ..... 3
- 第2章 話題から見た語彙シラバス(橋本直幸) ..... 33
- 第3章 コーパス出現頻度から見た語彙シラバス(松下達彦) ..... 53
- 第4章 語彙密度から見た語彙シラバス(佐野大樹) ..... 79
- 第5章 日本語学習者から見た語彙シラバス(劉志偉) ..... 95
- 第6章 日本語教師から見た語彙シラバス(渡部倫子) ..... 115

### 第二部 ニーズ別語彙シラバス論

- 第7章 理工系留学生のための文字・語彙シラバス(松田真希子) 139
- 第8章 日本語教育専攻大学院留学生のための  
語彙シラバス(石黒圭) ..... 159
- 第9章 子どもを持つ外国人のための語彙シラバス(森篤嗣) .. 179
- 第10章 就労者のための語彙シラバス(岩田一成・菊岡由夏) ..... 197
- 第11章 外国人看護師のための語彙シラバス(嶋ちはる) ..... 213
- 第12章 外国につながる子どもたちのための  
語彙シラバス(中石ゆうこ・建石始) ..... 231

あとがき 山内博之 253

執筆者紹介 267

# まえがき

森 篤嗣

## 1. はじめに

本書は、「語彙シラバス」というものをどのように考えるべきかについて、多角的かつニーズ別に検討した論文集である。

本書の書名は『ニーズを踏まえた語彙シラバス』である。しかし、「文法シラバス」に比べると「語彙シラバス」という語は聞き慣れないかもしれない。そこで、ここではまず語彙シラバスという語の考え方について述べ、続けて「ニーズを踏まえた」という看板を掲げるに至った理由を述べたい。

まず、日本語に限らず言語の習得においては、語彙力が極めて重要であることは理論的にも経験的にもよく知られている。例えば、本書に収録されている第3章の松下論文によれば、読解における語彙力の占める割合は、日本語で40～55%程度(Koda 1989、小森・三國・近藤 2004、野口 2008)にもものぼると述べている。また、経験的にも口頭テストなどで、「文法がうまい人より語彙の豊富な人の方に高い評価を与えたい」というようなことも、日本語教師としてよくあるのではないだろうか。

では、なぜ文法シラバスはよく知られているにもかかわらず、これだけ重要であると考えられる語彙シラバスは聞き慣れないのだろうか。それは、「できることからやる」という実現性の問題が大きかったと思われる。教材を作成する場合、構造シラバスであれば、本来は文型だけでなく語も構造的

に組まれるべきであるし、場面シラバスや話題シラバスであっても、場面や話題に適切な語を計画的に提示するべきである。もちろん、語の提示により、各課の単語リストはできるにしても、それは本当に語彙シラバスなのだろうか、場当たりの単語リストに終わっていないだろうか。この問題については、本書収録の第1章田中論文で確認して欲しい。

語彙シラバスとは、言語の習得に必要な語を、理念やニーズに基づいて配列し、学習者に提示するためのものである。文法シラバスと同じく、学習者の言語習得を円滑にするために順序よく作成され、計画的に提示されるものでなくてはならず、教材における語の提示はたまたま出てきたものであってはならない。電子的に利用可能なコーパスが整備され、研究者がそれぞれ取得したデータも形態素解析など、自然言語処理研究による技術で整備可能になってきた現在、語彙シラバスに関する研究は実現可能となってきた。今こそ、文法シラバスを見直すだけでなく、新たに「データに基づく」語彙シラバスに着手する好機である。

したがって、本書ではデータに基づいた語彙シラバスを検討するために、まずは、「第一部 アプローチ別語彙シラバス論」で、多角的に語彙シラバスのあり方を検討する。ただし、第一部全てがニーズを考慮しない一般的な日本語学習者を想定した語彙シラバス論というわけではない。松下論文、佐野論文は、BCCWJという均衡コーパスを用いながらも、例えばアカデミックライティングを必要とする日本語学習者なども視野に入れている。そして、劉論文は超級を目指す日本語学習者、渡部論文は年少者(外国につながる子ども)が主たる対象となっている。語彙シラバスを検討するということは、文法シラバス以上に、一般性よりも個別性を志向することになる。なぜなら、語は文法よりもはるかにバリエーションが多く、ニーズによって必要とする語彙が異なるからである。その意味では、第一部もアプローチ別を謳いながら、常に「ニーズを踏まえた」語彙シラバスををらんでいるのである。

そして、「第二部 ニーズ別語彙シラバス論」は、本書の書名でもある「ニーズを踏まえた」を純粹に対象としたものである。6本の論文全てに共通するのは、ニーズ別語彙シラバスを検討するために、独自のコーパスを構

築し、その語彙の特徴を分析している点である。文法シラバスであれば文型、その他のシラバスでも場面や話題を優先し、「教材ありきで単語リストができる」という付随的語彙学習ではなく、「ニーズ別語彙シラバスがあって教材を作る」という計画的語彙学習を願って書かれた論文ばかりである。

書籍という媒体の都合上、全データを論文に収録することはかなわなかったが、第二部だけではなく第一部も含め、本書に収録した論文のデータは可能な限り、下記のアドレスで公開している。

<http://www.9640.jp/genba/>

「ニーズ別語彙シラバスがあって教材を作る」という理念を実行するための足がかりにしていただければ、本書の編者として本望である。

## 2. 本書の構成

本書には、以下の12本の論文が掲載されている。3.では、この順に各論文について、簡単に解説していく。

### 第一部 アプローチ別語彙シラバス論

- 第1章：初級総合教科書から見た語彙シラバス（田中祐輔）
- 第2章：話題から見た語彙シラバス（橋本直幸）
- 第3章：コーパス出現頻度から見た語彙シラバス（松下達彦）
- 第4章：語彙密度から見た語彙シラバス（佐野大樹）
- 第5章：日本語学習者から見た語彙シラバス（劉志偉）
- 第6章：日本語教師から見た語彙シラバス（渡部倫子）

### 第二部 ニーズ別語彙シラバス論

- 第7章：理工系留学生のための文字・語彙シラバス（松田真希子）
- 第8章：日本語教育専攻大学院留学生のための語彙シラバス（石黒圭）
- 第9章：子どもを持つ外国人のための語彙シラバス（森篤嗣）
- 第10章：就労者のための語彙シラバス（岩田一成・菊岡由夏）
- 第11章：外国人看護師のための語彙シラバス（嶋ちはる）
- 第12章：外国につながる子どもたちのための語彙シラバス  
(中石ゆうこ・建石始)

### 3. 各章の紹介

#### 第一部 アプローチ別語彙シラバス論

##### 第1章：初級総合教科書から見た語彙シラバス（田中祐輔）

この論文では、過去から現在までの語彙シラバスの歩みに関する基礎的資料を提示することを目的とし、戦後日本において発行された初級総合教科書21種34冊の調査と考察をおこなっている。具体的には、(1)各語項目の出現頻度とその特徴、(2)全教科書に出現する語項目、(3)過半数の教科書に出現する語項目の特徴、(4)過半数の教科書で扱われている875項目に関する各教科書のカバー率、(5)50年代から00年代それぞれの教科書特有の語項目、(6)各語項目の提出順とその特徴、(7)「(1)」と「(6)」との相関関係、について分析を行い、戦後日本語教育において、主要初級総合教科書が、いかなる語を扱ってきたかについて明らかにしている。

新しい語彙シラバスを生み出すには、既存の教材がどのような語を提示してきたかを知らなければならない。昨今、リストラやスクラップ&ビルドという語も使われるが、研究に関しては無から有を作り出すのではなく、先人の積み上げを知り、学び、新たに積み上げていくものである。この論文は、その資料的価値もさることながら、先人に真摯に学ぶことが体現されていると言える。

##### 第2章：話題から見た語彙シラバス（橋本直幸）

学習者が日本語を学ぶ目的の多くは、日本語の語彙や文法などの「言語形式」を学ぶことではない。自身が望む「言語活動」を、日本語を使って達成することである。この論文では、学習者の言語活動を「話題」という枠で捉え、独自に設定した100の話題ごとに語彙を収録した「話題別語彙・構文リスト」（『実践日本語教育スタンダード』に掲載）を紹介している。さらに、この話題別語彙・構文リストを日本語教材へとつなげるために、「話題のネットワーク」を構築している。文法力の向上は「テキストの型」を指標に測られることが多いが、語彙力向上の指標は「扱える話題の数」である。この論文では、学習者が扱える話題を無理なく広げていけるよう、異なる話題間で共通して収録されている語の数をもとに、話題どうしの関連性を明らか

にしている。

本書のキーワードとなる「ニーズを踏まえた」の色があまり出ていない論文と見えるかもしれない。しかし、ニーズとは、学習者の属性によるものだけでなく、一人の学習者であってもその言語活動によっても変化するものである。話題とはまさに学習者の行動範囲、ひいては世界そのものを広げるものである。そもそも、言語学習とは「新たな世界に触れる」ということが大きな動機の一つであり、学習者に多様な話題での言語活動を保証するということが、言語教育の一つの夢であるとも言え、この論文はその夢を実現する足がかりとなるものである。

### 第3章：コーパス出現頻度から見た語彙シラバス (松下達彦)

この論文では、コーパス出現頻度から見た効率的な語彙学習順序について議論する。まず「効率的」ということについてこの論文での定義を定める。次にテキスト理解における語彙の役割を先行研究で確認する。そのうえで、共通ニーズの抽出の必要性、ニーズ領域の領域特徴語の抽出例として学術共通語彙、文芸語彙などを紹介し、異なる領域の語彙の学習が、テキスト理解のためにどの程度効率的であるかを測る指標として「テキストカバー効率」を提案する。最後に、テキストカバー効率を用いたテキストの分析により、効率性の観点から語のグループの学習順序を定められることや、テキストの語彙的な特性を可視化できることなどを論じる。

語彙習得がおおよそ頻度順に進むことはRead (1988) など多くの研究で確かめられている。頻度はコーパスから得られる指標の一つであり、頻度だけで全てがわかるわけではないが、重要であることは疑いない。この論文では、レベル別・ジャンル別コーパスを用いて、様々な語彙リストの特徴をあぶり出している。とりわけ「テキストカバー効率」は秀逸で、語彙リストだけではなく、同基準で特定のテキストの評価も可能となっている点が興味深い。

### 第4章：語彙密度から見た語彙シラバス (佐野大樹)

この論文では、語の使用傾向について、情報の詰め込み度が高いテキストで用いられるか、低いテキストで用いられるかを基準とした「語彙密度平均

値データ」と既存手法を補完的に用いることで、語彙シラバス作成に新しい観点を提供できる可能性があることを示している。事例として、このデータとある科目に特徴的な語を抽出した「特徴語リスト」を併用することで、「伝わる」(日常生活：話が広がる vs. 授業：熱や音が移動する)のように、日常生活と授業の両方で使われるが、各コンテキストでは異なる語義をもつ語の候補を特定できることを示している。特徴語リストから科目に特徴的な語のリストは得られるが、ここから情報の詰め込みの程度が低いテキストで利用される傾向が強い語を抽出することで、科目に特化した語と異なる語義をもつ語を区別できる。

コーパス研究の弱点の一つに、形態を基準とした頻度集計をした場合、多義語を区別できないということがある。この論文は、「どのようなテキストで使われるか」という観点を利用し、計量的かつ客観的に同形多義語を区別するという点が画期的である。「できることからやる」というのは、研究でも教育でも現実的な路線ではあるが、それに慣れて「これでよい」と諦めてよいわけではない。この論文は、語彙シラバスの研究に有用であるだけでなく、コーパス研究の「諦め」を打破するブレイクスルーを提供している。

## 第5章：日本語学習者から見た語彙シラバス (劉志偉)

この論文では、筆者自身(一学習者)が来日後とり続けてきた学習メモをもとに作成した語彙リストを、ネイティブ教師の手によって語彙難易度の判定が施された「日本語教育語彙表 ver1.0 (日本語学習辞書支援グループ 2015)」と比較している。学習メモを取り始めた2003年が、旧日本語能力試験1級を取得してから4年後であったことから、この論文では筆者自身のニア・ネイティブレベルを目指すための歩みにおける語彙に焦点をあてている。論文においては、両リストの間に見られる異同を明らかにしたほか、学習者(学習経験者)側の視点からネイティブ教師側の視点のみでは見落としがちな点も示している。具体的には「中国語母語話者が意外と漢字語彙を読めない」「ネイティブ教師が思っている以上にカタカナ語が難しい」「上位名詞だけでは不自由である」「固有名詞も学習者にとっては立派な語彙である」等が含まれている。

日本語教育に限らないが、言語教育において学習者自身が自身の学習経験を元に論文化をおこなうということはあまりない。どうしても主観が入らざるを得ないと本人も周囲も考えるからかもしれない。しかし、言語教育とは教師と学習者の相互作用によるものであり、教師視点だけでは一面的になる。この論文では、筆者自身のメモという主観的な一面を隠すことなく提示し、それを日本語教師の主観難易度判定が施された語彙リストと比較することにより補完するという教師と学習者の相互作用の両面をとらえる画期的な手法で学習者視点による語彙シラバスの必要性を見事に描いている。

## 第6章：日本語教師から見た語彙シラバス（渡部倫子）

この論文の目的は、外国につながる子どもたち（以下、CLD 児童）のための語彙シラバスに対する日本語教師の主観判定を明らかにすることである。日本語母語話者 98 名（うち日本語教師 43 名）を対象とした質問紙調査を実施し、小学校 3 年生の CLD 児童がつまりく 214 語を困難度順にリスト化している。また、日本語母語話者は、カテゴリー「難語」、「学習語」、「算数」、「国語」、「教科共通語」、「日常語」の順で、難しいと判定することを明らかにしている。さらに、教師歴（CLD 児童に対する指導経験と教員の在籍学級）は語彙の困難度判定にあまり影響しないことを示唆している。

対象は異なれど、第5章と対になるアプローチと言える。ただし、この論文では日本語母語話者 98 名の主観が統計的な手法により、束になってまとめられている。また、一般的な日本語母語話者と日本語教師の主観判定は類似しており、「教師から見た語彙シラバス」は「日本人から見た語彙シラバス」でもあると解釈できるという見解を示している点も興味深い。あくまで語の難易度判定に限ってのことではあるが、教師の専門性が否定されるという事実は、日本語教育にとっては残念なことではある。しかし、今後の主観判定研究にとっては、朗報であるといえる。なぜなら、データ収集が困難な教師判定にこだわる必要が無く、教師経験のない日本語母語話者の判定を活用することで、コストが軽減できる可能性を示唆しているからである。



## 第二部 ニーズ別語彙シラバス論

### 第7章：理工系留学生のための文字・語彙シラバス（松田真希子）

この論文では、理工系留学生のための語彙シラバスを提案する上で、まず現状の問題点として初級段階で行われている「一般的な日本語教育」が中級以降に始まる理工系日本語教育と語彙面での重なりが小さく、学習者の学習負担を高めていることを指摘している。その上で（1）初級からの専門内容重視型日本語教育（2）母語を活用した反転授業（3）Lexical Approach を組み込んだ語彙学習の重要性を指摘している。次に、大学学部1～2年の留学生の語彙シラバスの提案のために物理・数学等の専門基礎科目の教科書コーパスを開発し、特徴漢字と特徴語彙抽出を行っている。その結果、特徴度の高い漢字上位500字で、専門基礎科目テキストの漢字86%をカバーできること等を明らかにしている。このことより、分野に特化した漢字と語彙を初級段階から専門内容に関連付けながら学習することで早期に学習目標を達成できる可能性を指摘している。

初級では「一般的な日本語教育」をおこない、中級以降で専門日本語教育に移行していくという従来の教育モデルに真っ向から立ち向かう論文である。なぜニーズを踏まえる必要があるかと問われれば、効率的に学習するためだと答えるだろう。語彙教育においては、この問いと答えが特に強調される。「学習者にオーダーメイドの言語教育を」という目標は理想ではあるが実現は困難を極める。しかし、技術者を目指す理工系留学生は、一定の数が存在し、来日前に自国で日本語を学ぶツイニングプログラムも盛んである。初級から専門日本語教育をおこなう土壌は既にあり、この論文の主張は絵に描いた餅ではない。

### 第8章：日本語教育専攻大学院留学生のための語彙シラバス（石黒圭）

この論文では、学術日本語の専門語彙教育のために、形態素レベルの特徴語と、複合語レベルの専門語の二つの観点から、日本語教育学の専門語彙を検討した語彙シラバスの一例を提案している。形態素レベルの特徴語は、日本語教育を専攻する42名が書いた修士論文を対象コーパス、BCCWJを参照コーパスとし、対数尤度比を用いて選定している。一方、複合語レベルの

専門語は、KH Coder の複合語検索を用いて選定している。その結果、専門語は、当該専門分野でしか使われない狭義専門語、関連分野でも使用の可能性のある広義専門語、一見専門語には見えない日常専門語に整理され、文章語は、学術性の高い研究文章語、説明文一般に使われる一般文章語に整理されるとしている。また、論文に頻出する、使い分けの困難な類義表現についても、いくつか例を挙げて論じている。

この論文の「はじめに」に書かれていることであるが、日本語教育専攻大学院留学生という対象は、日本語教師にとってもっとも身近な専門分野であり、その語彙についても理解可能な分野である。この論文は、そのような分野の専門語彙について、単体としても極めて興味深い知見を提供してくれるが、その真の目的は他分野への拡張を見据えたケーススタディである。他分野研究者との協働により、あらゆる分野での専門日本語教育のための語彙シラバスの構築が可能になるのではないかという夢を抱かせる論文である。

## 第9章：子どもを持つ外国人のための語彙シラバス（森篤嗣）

この論文では、「子どもを持つ外国人」を対象に、対象者のニーズに即した語彙シラバスを模索している。対象者のニーズは、対象者や関係者へのインタビューやアンケートなどで把握するのが一次的である。しかし、対象者自身の主観による語彙選定は、学習者自身も気づいていない「隠れたニーズ」を掘り起こせない可能性がある。生活者としての外国人など、学習経験の少ない対象者の場合、この傾向はさらに強くなる。そこで、この論文では二次的ではあるが、学校配布物と連絡帳という媒体を調査し、そこで使われている特徴語を抽出し、「子どもを持つ外国人」のための語彙シラバスの探索を試みている。

ニーズ別語彙シラバスにおいて重要なことは、対象者のニーズに即した語彙の特徴をいかにうまく抽出できるかという点にある。この論文では、対数尤度比を用いて対象コーパスの語の特徴度を抽出する方法について、基本的な考え方から順に提示している。その意味では、特徴語抽出についてのケーススタディとしても、対数尤度比による特徴度語抽出の解説論文としても読むことができる。

## 第 10 章：就労者のための語彙シラバス（岩田一成・菊岡由夏）

この論文は、製造業で働く就労者の言語運用を分析している。静岡県浜松市にある企業内でのやりとりをボイスレコーダーに収録して、そこで用いられている語彙をまとめた。品詞別で見ると、動詞・形容詞語彙については旧日本語能力試験 3 級・4 級でかなりの部分がカバーできること、名詞語彙については当該分野の特徴度が高いためカバー率が非常に低いことがわかった。つまり動詞・形容詞は一般的な初級教育で、ある程度は理解できるようになるが、名詞はそうはならないということである。具体的に名詞は、カテゴリーを三つ（①指差しできる具体物語彙、②指差しできる抽象物語彙、③指差しできない抽象物語彙）に分けて、③については訳語を用いるなど特に丁寧な指導が必要になるという提案をした。

リーマン・ショックにより、減少した製造業外国人就労者であるが、依然、生活者としての外国人に占める割合は高い。厚生労働省（2014）によると、外国人労働者数 787,627 人のうち、製造業は 272,984 人で 34.7% を占める。そして、これら製造業就労者は日本語教育を受ける機会も時間も十分ではないのが実状である。したがって、ニーズを踏まえて、短時間で効率的な日本語教育を可能とする語彙シラバス構築がより必要な分野である。この論文における名詞の指導における三つのカテゴリーの提案は即効性が高く、この概念を援用した教材化が待たれる。

## 第 11 章：外国人看護師のための語彙シラバス（嶋ちはる）

この論文は、外国人看護師が日本で看護師として就労する場合に必要となる語彙の抽出を目的としたものである。看護現場のインターアクション場面の一つとして、看護師が勤務交代時に患者について報告する「申し送り」場面を取り上げ、実際の申し送り場面のビデオ録画をデータに、そこで使用されている語彙を調べた。申し送りの語彙の特徴度と、国家試験の語彙と申し送りの語彙の比較という二つの視点から分析した結果、病床数管理に関する語彙や処置や検査に関する語彙など、申し送りに特徴的な語彙の一端が示された。また、省略語やドイツ語に由来する医療用語など、医療現場で使用される語彙を整理する上での今後の課題を提示した。

厚生労働省(2014)によると、EPAによって平成20年度にインドネシアから看護師候補者104名、介護福祉士候補者104名を受け入れたのを皮切りに、平成21年度からはフィリピン、平成26年度からはベトナムからも受け入れをはじめ、平成27年度までに看護師候補者1,834名、介護福祉士候補者3,632名の計5,466名(インドネシア2,733名、フィリピン2,304名、ベトナム429名)を受け入れている。また、EPAとは別に中国からも看護・介護に従事するため来日する外国人が増えている。政策の是非はさておき、日本語教育としては、こうした外国人看護・介護人材が、国家試験対策も含め、日本の医療現場などで円滑に就労できることを支援していく必要があるだろう。なぜなら、円滑なコミュニケーションは看護・介護を受ける日本人にとっても、そして来日する外国人にとっても利益をもたらすからである。この論文は、円滑なコミュニケーションの妨げとなりやすい語彙の問題を解決し、看護・介護のニーズを踏まえた語彙シラバスの基礎となるものである。

## 第12章：外国につながる子どもたちのための語彙シラバス

(中石ゆうこ・建石始)

この論文では、初等教育の現場において教師が指導の際に配慮すべき語彙の指針となることを目標に、小学校3年生に焦点化して、外国につながる子どもたちのための語彙シラバスを作成した。そのために日本語授業の授業記録の分析を行い、複数回指導があった語に共通する意味的な特徴を明らかにすることで、現場の教師にとって指導の難しい語の傾向を示した。また、先行研究の語彙リストと比較することで、より汎用性の高い語彙リストを目指した。これらの分析を通して、指導が困難な語に共通する特徴として、教科に特有の抽象的な概念の語、日常生活の語のいずれもが難しいこと、時を表わす語、方角・方向を表わす語などの7つのカテゴリーの語は指導が困難な語であることが示唆された。

外国につながる子どもたちのための語彙研究としては、工藤(1999)や田中ほか(2011)など、学校教科書や子ども向けの辞典をコーパスとして調査し、語彙を抽出する研究がある。この論文では、こうした先行研究の語彙リストを、実際におこなわれた日本語授業の授業記録と照らし合わせること

で、より教育現場に密着した語彙の抽出に成功している。学校教科書は、子どもたちが触れる身近な教材である一方、全国で使用するために汎用性を優先せざるを得ない。その意味で、学校教科書と授業記録という汎用性と個性を照らし合わせて考察したこの論文は、現状において教育に有用な語彙シラバスを目指すための最適解の一つを体現していると言える。

## 引用文献

- 工藤真由美 (1999) 『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』 ひつじ書房。
- 厚生労働省 (2014) 「「外国人雇用状況」の届出状況まとめ (平成 26 年 10 月末現在)」 (<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000072426.html>, 2015 年 11 月 13 日取得)。
- 国際厚生事業団 (2015) 「平成 28 年度版 EPA に基づく外国人看護師・介護福祉士受け入れパンフレット」. (<http://www.jicwels.or.jp/files/E291A0H28E78988E38391E383B3E38395E383ACE38383E3838.pdf>, 2015 年 11 月 13 日取得)。
- 小森和子・三國純子・近藤安月子 (2004) 「文章理解を促進する語彙知識の量的側面——既知語率の閾値探索の試み——」『日本語教育』 125, pp. 83–92.
- 田中牧郎・近藤明日子・平山允子 (2011) 「教科書コーパス」『言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』特定領域研究「日本語コーパス」言語政策班, pp. 7–54.
- 日本語学習辞書支援グループ (2015) 「日本語教育語彙表 ver1.0」. (<http://jisho.jpn.org/>, 2015 年 2 月 25 日取得)。
- 野口裕之 (2008) 「試験結果の分析」国際交流基金・日本国際教育支援協会 (編) 『平成 17 年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』 pp. 45–111, 凡人社。
- Koda, Keiko (1989) The effects of transferred vocabulary knowledge on the development of L2 reading proficiency. *Foreign Language Annals* 22(6), pp. 529–540.
- Read, John (1988) Measuring the vocabulary knowledge of second language learners. *RELC Journal* 19(2), pp. 12–25.

第一部

# アプローチ別語彙シラバス論

## 第 1 章

# 初級総合教科書から見た 語彙シラバス

田中祐輔

### 1. はじめに

この論文は、初級総合教科書の側面から語彙シラバスについて考察するものである。現在、「シラバス作成を科学として成り立たせるためには、シラバス作成に反証可能性を持たせることが必要である。そのためには、まず、何らかの客観的根拠・データに基づいてシラバスを作成することが必須となる。」(山内 2014: 203) という考えの下、「データベース的な議論」(庵 2012: 5) が展開されているが、この論文は、そうした議論に必要な、過去から現在までの語彙シラバスの歩みに関する基礎的な資料を提示するためのものである。具体的には、戦後発行の 21 種 34 冊の初級総合教科書を通時的観点から調査し、戦後日本語教育において初級総合教科書が、いかなる語を扱ってきたかについて考察する。

### 2. 問題の所在

#### 2.1 初級総合教科書の語彙シラバス

「語彙」の定義として、国立国語研究所 (1988) では「一定の範囲において行われる語の集合である」(p. 3) と述べられている。日本語教育学会 (編) (2005) では「ある範囲のなかの語 (単語) の集合をいう」(p. 222) とされ、「初級日本語教科書に出てくるという基準で範囲を区切った語の集合を『初

## 第2章

# 話題から見た語彙シラバス

橋本直幸

### 1. はじめに

一般に、日本語教育で「語彙と文法」といった場合、「語彙」は「実質語」（または「内容語」）のことを指す。「実質語」とは、機能語とは異なり、実質的意味を持った語であるから、当然のことながら、その表そうとする内容に関係のある語ということになる。つまり、何か言い表したい内容があった場合、そこには、その内容に即したある一定のまとまった語群が存在するし、逆に内容によってはまったく異なる語が集まることになる。

日本語教育における語彙リストについて述べた橋本・山内(2008)では、日本語教育にとっての「使える語彙リスト」として、語を話題別に分類・配列した語彙リストの提案を行っている。この背景にあるのは「言語活動と言語形式の融合」という理念である。通常、ことばを用いる際は、「昨日見た映画の面白さを伝えたい」「旅行先の様子をみんなに伝えたい」「政府の経済政策に対して意見を述べたい」のように、まず目的とする言語活動があり、それを達成するために、語彙や文法が必要となるのである。この論文では、こういった言語活動の中心的なテーマを「話題」と位置づけ、それぞれの話題でまとまって出てくる語群を話題別語彙とする。こうした話題別語彙をまとめてリスト化することこそ、日本語学習者が日本語で言語生活を送る上で、非常に有効であると言えるのではないだろうか。



## 第3章

# コーパス出現頻度から見た 語彙シラバス

松下達彦

### 1. はじめに

この論文ではコーパス出現頻度から見た効率的なシラバス（特に語彙学習順序）について議論する。語彙学習の負担は非常に大きい。しかしその割には語彙学習の効率についての研究はまだ少ないのが現状である。

ここではまず「効率的」の定義を定め、次にテキスト理解における語彙の役割を先行研究で確認する。そのうえで、共通ニーズの抽出の必要性、ニーズ領域の領域特徴語の抽出例を示し、語彙学習の効率性を予測する指標として「テキストカバー効率」を提案する。最後に、テキストカバー効率を用いたテキストの分析により、効率性の観点から語のグループの学習順序を定められることや、テキストの語彙的な特性を可視化できることなどを論じる。

### 2. 「効率的」とはどういうことか

効率的であるとは一般的に「より少ない時間や労力で目的を達成できる」ということであろう。語彙学習に即して、ここでは「より少ない学習語数でより多くのテキストが理解できること」と定義する。理解なしに産出することは普通はないので、ここでは理解に絞って議論を進める。また、現状では聞くための語彙シラバスを考えるのに十分な話しことばコーパス（目的を定めて収集した大量の言語資料）が整っていないので、ここでは書きことばに

## 第4章

# 語彙密度から見た 語彙シラバス

佐野大樹

### 1. はじめに

語彙シラバスを作成する際に重要な事項のひとつは、どのような選定基準・指標を語の選定に用いるかということである。例えば、「弱々しい」「脆弱」という同義関係にある語をシラバスに組み込む際に、前者は初級学習者、後者は上級学習者向けシラバスに含めることが経験的に妥当だと思われる。しかし、なぜそのようにそれぞれの語を選定できると考えるのか、基準が明確でない場合もあり、裏付けとなる論拠やデータが存在しないような場合もある。

しかし近年、ある一定の基準にもとづき収集されたテキストの集合であるコーパスの普及とともに、語の使用傾向を実データから計量的に把握し、実証的なデータにもとづいて語彙シラバスを作成しようという試みが増えてきている。この論文はこのような試みのひとつとして、語彙密度 (Halliday 1985) を用いた方法を提案する。

語彙密度 (lexical density) は、情報の詰め込みの程度を観点として、テキストの「書き言葉らしさ」・「話し言葉らしさ」をあらわす特徴量として Halliday (1985) によって提唱されたもの (詳しくは 2. を参照) で、書き言葉らしいテキストの語彙密度は話し言葉らしいテキストの語彙密度より高くなる傾向があるとされている。この特徴量は、本来テキストの特徴をあらわそ

## 第5章

# 日本語学習者から見た 語彙シラバス

劉 志偉

### 1. はじめに

この論文では、上級以上の日本語学習者がニア・ネイティブレベル（劉2015b）を目指すための語彙シラバスについて、学習者の視点から考える。具体的には、筆者自身の学習メモをもとに作成した語彙リスト（以下、劉データ）と、ネイティブ教師による語彙難易度の判定が施されている語彙リスト（以下、砂川データ）とを比較することにより、両者間に見られる相違を明らかにする。その上で、ネイティブ教師の視点のみでは見落としがちな点を提示する。

以下、2.では、この論文で用いる2つの語彙リスト（劉データと砂川データ）について説明を行う。論文全体においては劉データを軸にし、砂川データとの比較を行う。3.では劉データのブロック3を考察対象とする。4.では劉データのブロック4について考察を行う。

### 2. この論文で用いる2つの語彙リストについて

この論文では、前述の通り、一日本語学習者である筆者による学習メモをもとにした語彙リストと、ネイティブ教師による語彙難易度が施されている語彙リストとの2つを用いる。具体的な考察に先立ってこの節では両者の概要について説明を行っておく。

## 第6章

# 日本語教師から見た 語彙シラバス

渡部倫子

### 1. はじめに

日本語教師のビリーフ(言語・言語教育・言語学習等に対する信念や直観)研究は、1990年代後半から多くの研究が行われてきた。語彙指導に関するビリーフについては、文法、文字、発音等と並んで、「指導内容において語彙が一番重要である」(阿部・嵐・木原・篠原・須藤・中川 2013、久保田 2006)、「基本となる文法や語彙を確実に学習するよう指導するのが望ましい」(要 2005)等のビリーフが報告されている。しかし、語彙だけに焦点をあてた研究は、十分に行われているとはいえない。そこで、この論文では日本語教師の直観、つまり主観的な判定をもとに、語彙に対する日本語教師のビリーフ(教師から見た語彙シラバス)を解明することを目指す。

主観判定調査の対象は、本書の第12章「外国につながる子どもたちのための語彙シラバス」(中石・建石)の構築過程で報告された中石・建石(2015)の語彙リストとした。本書の第12章の内容とは異なる部分(後述する指導が難しい語のカテゴリー分け等)があるので注意されたい。外国につながる子ども(以下、CLD 児童: Culturally, Linguistically Diverse children、多様な文化・言語を背景に持つ子ども)に焦点をあてた理由は、以下の3点である。第一に、日本語指導が必要な CLD 児童生徒が増加しているにもかかわらず、日本語教育の充実が遅れているからである。第二に、日本語指導に携

第二部  
ニーズ別語彙シラバス論

## 第7章

# 理工系留学生のための 文字・語彙シラバス

松田真希子

### 1. はじめに

理工系留学生のための語彙研究を含む日本語教育研究は長年の蓄積があり、その多くが教育現場に効果的に還元されている。一方、仮に語彙シラバスを学習進度と学習内容、語彙の重要度と意味とを関係づけた語彙リストの集合体と定義するなら、日本語理工系語彙シラバスというものは管見の限りない。

理工系専門日本語教育に関する数多くの研究によって導かれた教育資源は、(1)教育関係者によって経験的に導かれたその分野における重要用語集や辞書、(2)単語の頻度・学習難易度(旧日本語能力試験出題基準)・テキストカバー率・特徴度に基づいて分類された理工系語彙リスト、(3)専門用語に重要度や頻度、分野情報、例文情報を付与した検索システムが中心である。

理工系の専門日本語というのは分野間の広がりが大きく、語彙の重なりも期待しにくいいため、共通して学ぶべき語彙リストや、それらの語彙の学習順序の提案や実際の教育への応用は容易ではない。しかし、その理由で日本語教育と専門教育が十分に重なり合わない状況が続き、学習者が専門のテキストの中から日本語の語彙表現を効果的に学ぶ機会に恵まれていないとすれば、それも問題である。

そこでこの研究では理工系の文字・語彙シラバスの提案とそのシラバスを用いた教育応用の提案を試みる。

## 第8章

# 日本語教育専攻大学院留学生 のための語彙シラバス

石黒 圭

### 1. はじめに

近年、アカデミック・ジャパニーズの研究の進展が著しい。自然科学系の諸分野では、論文を英語で書くのが原則となりつつあるが、人文・社会科学系の諸分野では、日本語で論文が書かれることが多い。そのため、日本に留学してくる留学生は、学位取得のため、専門性の高い日本語を学ぶ必要がある。

学術諸分野の専門性を支えるのは語彙であるが、現実のアカデミック・ジャパニーズの研究は文法の研究に偏っている。その理由はおもに二つ考えられる。一つは、語彙は分野別に細分化されており、それぞれの分野別に研究を進めなければならず、効率が悪いこと、もう一つは、アカデミック・ジャパニーズを調査する研究者の多くは日本語教育関係者であり、専門諸分野の語彙に精通していないことによる。

しかし、分野別の語彙を調査・分析しないかぎり、日本語学習者に語彙面の適切な手当てを施すことは不可能である。幸い、筆者は前職が社会科学の総合大学である一橋大学であり、社会科学に強い日本語教員と、留学生教育に理解のある専門教員の連携のもとで、社会科学の語彙研究をする環境に身を置き、商学・経済学・法学・社会学・国際政治学の5分野を対象としたプロジェクトを推進する機会に恵まれた。2011年度と2012年度、一橋大学の大学戦略推進経費によって行われたもので、現在では今村和宏氏の科学研

## 第9章

# 子どもを持つ外国人のための 語彙シラバス

森 篤嗣

### 1. はじめに

言うまでもないことであるが、対象者別の日本語教材を作成するとき、必要なことは対象者のニーズを把握することである。ニーズは多岐に渡るが、言語的な側面に目を向けたとき、もっとも大きな領域を占めるのが語彙であろう。ある分野を知るということは、そこで使われる言葉を知ることとほぼ等しい。例えば、子どもを持つ外国人が子育て・教育ということに関わっていくとき、保育所や小中高等学校で使われる言葉を知っている必要がある。

この論文では、上記のような考えに基づき、対象者のニーズに即した語彙シラバスを模索するものである。対象者のニーズは、対象者や関係者へのインタビューやアンケートなどで把握するのが一次的な調査である。この論文では二次的ではあるが、学校配布物と連絡帳という媒体を調査し、そこで使われている言葉から探索を試みる。

### 2. 対数尤度比による特徴度の抽出

この論文では、学校配布物と連絡帳をそれぞれ一つのコーパスとみなし、これらに特徴的にあらわれる語の抽出を試みる。学校配布物ないし連絡帳を「対象コーパス」、現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、BCCWJとする）の図書館・書籍・固定長（LB\_fixed）を「参照コーパス」として設定し、対



## 第 10 章

# 就労者のための 語彙シラバス

岩田一成・菊岡由夏

### 1. はじめに

製造業の現場を外国人就労者が支えていることはよく知られている。日系人就労者だけでなく、技能実習生、外国人配偶者などさまざまな人が関わっている現場であるが、これまでやり取りの実態を語彙的な側面から分析している研究がない。菊岡・神吉(2010)のように言語のやり取りを扱ったものはあるが、具体的な語彙リストを抽出しているわけではない。この論文では、製造業の現場でどういった語彙のキャッチボールが行われているのかを明らかにしたい。対象となるのは現場で働く人たちの会話である。カテゴリー別の語彙リストを提示し、その教育提案を行いたい。

語彙調査に基づく研究は、書き言葉を扱ったものが多い。村岡・柳(1995)、村岡・影廣・柳(1997)では農学系学術雑誌を対象として、岩田(2014)では看護師国家試験を対象として、語彙研究が行われている。一方、話し言葉ではビジネス現場の語彙を抽出した池田(1996)があり、この論文のスタンスと非常に近い。そこでは、ビジネス場面としてミーティング、打ち合わせ、電話を中心に30時間録音したものをデータとして用いている。この論文は職場ジャンルが製造業である点で、先行研究と異なる。

## 第 11 章

# 外国人看護師のための 語彙シラバス

嶋ちはる

### 1. はじめに

この論文は、今後ますます増加が予想される外国人看護師に対する日本語教育で扱うべき語彙について、実際の看護現場におけるコミュニケーションをデータとして考えようとするものである。経済連携協定 (EPA) に基づく外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れは、2008年8月にインドネシアから第一陣が到着して以来、現在の送り出し国はインドネシア、フィリピン、ベトナムの3か国に広がっている。また、2005年に規制改革が行われたことにより、外国で看護師資格を取得したものに対し、国家試験受験資格認定審査を経て看護師の国家試験を受験する道が開かれるようになり、中国人を中心にEPA以外のルートで来日し日本で看護師として働く外国人の数も飛躍的に増加している (Asato 2012)。

日本で看護師として就労するためには、どちらのルートの場合であっても、日本の看護師の国家試験に合格していることが条件となる。そのため、これまで、外国人看護師 (候補者) に対する日本語教育では国家試験対策に重点が置かれてきた。一方で、国家試験に合格した外国人看護師や受け入れ施設からは、実際は合格してからのほうが仕事に対する責任も増し、より高度な日本語力が求められているとの声が聞かれるようになってきている。外国人看護師の試験合格後の課題も指摘されており (石原 2012、岡田・宮崎

## 第 12 章

# 外国につながる子どもたちのための語彙シラバス

中石ゆうこ・建石始

### 1. はじめに

現場の教師が指導の際に配慮すべき語彙の指針となる「外国につながる子どもたちのための語彙シラバス」として、中国にルーツを持つ小学3年生に対する授業記録に基づいた重要語リストを作成する。バトラー後藤(2011: 68)の指摘によれば、学習言語の習得において、語彙は要であると言える。語彙シラバスを作成することで、現場の教師が丁寧に説明すべき重要な語彙がどんなものを事前に理解することができる。

そのための議論の流れとして、**2.**では、「外国につながる子どもたち」の定義をし、彼らにとってどんな語が難しいかについて指摘した先行研究の知見をまとめる。続く**3.**では、小学3年生対象の日本語授業の授業記録を分析し、その中で複数回の指導が見られた語を重要な語であると位置づける。また、それらの語に共通する意味的な特徴を明らかにすることで、現場の教師にとって指導の難しい語の傾向を示す。**4.**では、この論文の重要語リストを学校教育において参考とされる既存の語彙リストと比較し、外国につながる子どもたちにとって特に重要な語を絞り込む。**5.**では、この研究で抽出された重要語のリストを記載する。